



障がい者スポーツの祭典

パラリンピックを楽しもう! ①

※370号から3回にわたって「パラリンピックを楽しもう!」をご紹介します。



伊藤数子 氏

新潟県出身。特定非営利活動法人STAND代表理事。スポーツ庁スポーツ審議会委員。東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会顧問。パラスポーツをスポーツとして捉えるサイト「挑戦者たち」編集長。年齢・性別・障害・職業・国や地域の区別なく、ともに明るく豊かに暮らす社会を実現するための「ユニバーサルコミュニケーション活動」を行っている。その一環としてパラスポーツ事業を展開。パラスポーツ体験やボランテニアアカデミーを運営している。著書には「ようこそ! 障害者スポーツへ～パラリンピックを目指すアスリートたち～」(廣済堂出版)がある。

特定非営利活動法人STAND <http://npo-stand.jp/>

もっと知ろう! パラリンピックの歴史

● 世界初のパラリンピック2回目開催

今年はオリンピック・パラリンピックイヤー。パラリンピックは第15回夏季大会がブラジルのリオデジャネイロで開催されます。また2020年東京大会の開催が決定したことを受け、国民の関心も引き、その認知度は年々高まりつつあります。

実はこの東京パラリンピックは、1964年の第2回に続き同一都市での2回目の開催となります。これは世界で初めてのことで、とても名誉なことではないでしょうか。しかし1964年の東京オリンピックは知られていても、同年にパラリンピックが開催されていたことを知っている人は、残念ながらそれほど多くはないようです。

そこで今から52年前に東京で行われたパラリンピックの存在と共に、ぜひ知っておいてほしいのが、その大会が日本において障がいのある人の意識を大きく変えるきっかけを作ったという事実です。

● パラリンピックが日本にもたらしたもの

第2回の東京パラリンピックは、下肢に障がいのある人たちが車いすで競技に参加していました。当時の日本ではこうした障がいのある人たちのほとんどが施設か病院で24時間の介護を受けて暮らしていました。

ところが外国から来た選手たちは、日本人がもつ障がい者のイメージを覆すものでした。彼らは試合が終わるとタクシーで浅草や銀座に観光に出かけたり、選手村で交流の場として設けられていたクラブで、歌ったり踊ったりと大いに盛り上がっていたそうです。

大会に出場した日本の選手やその関係者たちは、彼らと話をすることで、多くの選手が仕事を持ち、結婚をしていることを知り、「障がいがあっても、仕事をもったり、家族をもったりすることができる」「車いすでも街に出かけることができる」と、自分の人生に希望をもつことができたといいます。これをきっかけにして、障がいのある人たちの意識が変わり、また関係者の中にも障がいのある人たちにスポーツを積極的に取り入れようという動きも出てきたのです。

まさしくこれが、前回の東京パラリンピックのレガシー。障がいのある人たちの自立への道を拓き、また日本における障がい者スポーツのスタートラインともなりました。

東京で再び開催される2020年のパラリンピックは、新たな変革のチャンスです。パラリンピックを契機に、私たちは未来に何をつくることができるでしょうか。



HUMAN HUMAN プラスはウェブサイトへ

eふぁみり もあわせてご覧ください!

<http://jp.fujitsu.com/family/honbu/family/>

未来へつなぐ①「大学との連携」について

もうひとつのオリンピック

障がい者スポーツは1950年代、イギリスの医師・グッドマン博士が、戦争で負傷した兵士たちが多くいた病院で、治療に車いすを使っていたスポーツを取り入れたことから始まります。それは体力づくりだけでなく精神的な助けにもなり、やがて障がい者の治療にスポーツが有効であることが明らかになりました。

こうした取り組みはヨーロッパを中心に広がり、1960年、ローマオリンピック終了後に同地で国際大会が開催され、アーチェリー、陸上、車いすバスケットボール、水泳、卓球な

ど8つの競技に、17カ国から138名の選手が参加。これが後に第1回パラリンピックと認定されました。続く1964年東京オリンピック後には第2回大会が開催され、19の国と地域から238名の選手が参加。日本からも53名の選手が参加しました。また、冬季の第1回大会は、1976年にエンツェルツヴィークで開催され、スキー競技が行われています。

なお、パラリンピックという名称が最初に使われたのは第2回の東京大会です。当時は車いすの選手が参加していたため、英

語で下半身麻痺を意味する「paraplegia」と「Olympic」を組み合わせ名づけられたのです。その後、車いす以外の選手も多く参加するようになり、「もうひとつの」を意味する「parallel」と「Olympic」を合わせた「Paralympic」という解釈に変更され、現在に至ります。そして2008年の北京大会からは、オリンピックと同じ会場や選手村などを使うことが決められ、「もうひとつのオリンピック」として障がい者スポーツの世界最高峰の大会と認知されるようになったのです。